

題名とその用語の特性——題名分析法の観点から

Characteristics of Titles and Their Words ;
In the view of title analysis

浜 田 敏 郎

Toshio Hamada

Résumé

He tries to verify the method which was found useful in the case of categorizing and forming indexing terms. This method is to divide titles of journal articles into the smallest unit words to find the frequency of use of each unit word, and to get the representative word by calculating the above data. Then the category is designed by analyzing words connected with the representative word among titles, and each word is categorized and formed into indexing terms.

Especially, he clarifies the characteristics of titles and their words, since they are the source of the method. And he gains the ratio of speech and noun, stability of compound word, form of compound, etc.

(School of Library and Information Science)

序

- I. 題名の特性
- II. 合成語の分割単位について
- III. 合成語の結合タイプについて
- VI. 結

序

著者は検索語の基礎設計のために逐次刊行物等の題名を処理し、これを基礎としてカテゴリーを作成し、用語を調整して分類表、件名標目表、シソーラス等の作成を考察して来た。そして、この手法を題名分析法と名づけたのである¹⁾。いくつかの分野においてこの手法を適用した結果、一応その方法の普遍性が明らかになって来た

のである。今まで調査が先行していたので、今回はこの方法を裏づけるためにいくつかの論点に注目した。

I. 題名の特性

検索語とは自然語系列の KWIC, KWOC, Uniterm, Descriptor, 件名等から人工語系列の分類, Code 等々検索に必要なすべてのタイプの見出し語の体系を意味する。このような検索語を作成する基礎資料として題名群

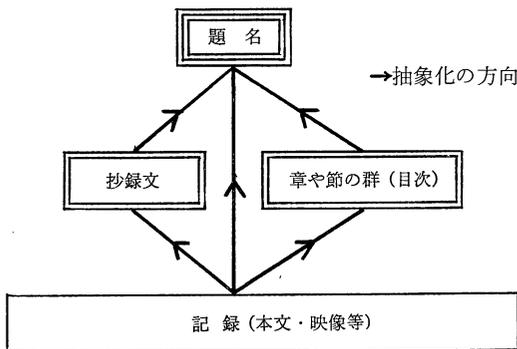
題名とその用語の特性

を選んだ理由について考察するには先ず題名の特性について調べる必要がある。

A. 題名を文と見なす

題名とは単行本、逐次刊行物の記事や論文、映画フィルム、スライド、録音テープ等々の各種の記録内容を極度に抽象化した簡潔な文であると見なす。

第1図 記録の抽象化



文章には構成的な文章と非構成的な文章とに分ける考え方があ。構成的な文章について、樺島忠夫は次のように説明している。

構成的な文章とは語や文を組み立て、関係づけて内容を組み立てていくものである。すなわち文中にあっては文の成文が主語、述語の関係、修飾の関係などをもち、また文と文との間には接続関係をもって文章を組み立てている。このような文章を構成的な文章と呼ぶことにしよう²⁾。

これに対して非構成的な文章としては、例を演奏される曲目だけをあげたもの、新聞記事の見出し、受け手への対人的働きかけの度合の強い「オーイ。」「もしもし。」「おはよう。」等の名詞的表現のものが非構成的な文章としている。

「演奏される曲目だけをあげたもの」が非構成的な文章であるとする、単行本の目次は文章といえることができる。もしも演奏される曲目が一つであれば、この一つの曲目も文章であるかは明確でないが、もしも一つの曲目でも文章ということになれば、単行本や各章節の題名も文章といえることができる。一方、「新聞記事の見出し」は明らかに非構成的な文章として認めている。「見出し」

は「題名」と同じであれば「題名」は文章であるということになる。

市川 孝は文について次のような例をあげて述べている。

△△ウイスキー (ネオン塔)
一段とおいしくなった〇〇ビール (広告)
英語塾 河野 (電柱のはり紙)
××商事 (看板)
山田一郎 (表札)

文は、客体的表現である詞と、主体的な表現である辞との結合から成る統一体であるから、上のような表現を文と考えることは困難である。上の「△△ウイスキー」は、「ウイスキーは△△」とか「△△ウイスキーを」とかの表現(これらは文である。)とは異なり、末尾になんらかの辞(あるいは零記号)を結合させて理解すべき必然性を持たないと見ることができよう。それは単なる表示に過ぎないと考えられる。しかし、それは、辞書中の見出し語や、文の分析の結果得られた概念だけを表わす、言わば抽象的な表現とは違って、表現されている現場と相補い、また、そこに表現されている他の表現と連関することによって、そのままの形で、概念以外のある種の告知を表わすものとして機能している表現と言ってよいと思う。そういう意味で具体的な表現と考えられるこれらの単語(の集合)をとくに「表示」と呼んでおくことにしたい。

表示には、孤立的に表出される場合(看板・表札など)と、他の表現(他の表示または文)との連関において表出される場合(領収書などの日付・署名・宛名等の類。広告文中などにも見られる。)とがある³⁾。

はたして題名は「表示」であるかどうかという問題である。単行本の題名によく見られる単純な形、例えば「政治学」「言語」等は「表示」の範ちゅうに入りそうである。一方、新聞の見出しや雑誌の記事題名には「文」の範ちゅうに入るものが多くあるようだ。すなわち、題名には「表示」と「文」との二種類が存在することになる。

曲目名、題名の後に「～を演奏する」「～について論ず」「～について述べる」「～について話す」等をつけて考えれば全部が文になることが明白である。上記の広告塔、看板、表札に表示されている語の後にこれらをつけても何んの意味もない。逆に、これらの語が単行本や雑誌記事の題名である場合はどうなるであろうか。

いずれにせよ、雑誌記事の題名や新聞記事の見出しは

文であるので、ここでは題名の機能として最初に述べたように本文を極度に抽象化した最も簡潔な文と見なし、表示の機能を兼備するので省略化されたものとする。

B. 抽象化された文の特性

前に題名は本文を極度に抽象化したものとした。この抽象化を要約化と凝縮化にわけて考えることにする。

要約化とは内容の細部をはぶいて骨組みだけを表わす表現法であり、凝縮化とは文章の中で重複している成分や意味的に大して重要でない成分をできるだけへらし、なるべく少ないことば数で表わす表現法である。少しのことばで大きな表現対象を表わそうとする場合に要約化と凝縮化とが同時に行なわれるのが普通である。

要約化、凝縮化によって生ずる文章の特性を次にあげる。

- 1) 要約化によって生ずる文章の特性は名詞の比率が大きいことである。
 - 2) 凝縮化によって生ずる文章の特性
 - a) 漢語（字音語）の使用率が大きい。
 - b) コソア系の指示詞（これ、その、あれ等）の利用率が小さい。
 - c) 文の構造が複雑になり文の長さが長くなる。
- 樺島忠夫はこのことについて次のように述べている。

名詞的な文章が現われる一つの場合は、なるべくことば数を少なくして多くの内容を表わそうとする場合である。たとえば新聞の見出しがそうである。新聞の見出しは、新聞記事の内容を一見してわかるように簡単なことばで表わす。……

このようにかなりの大きさをもつ表現対象を少しのことばであらわそうとする場合にとられる表現法には次の二つが考えられる。

- (1) 要約化
- (2) 凝縮化

……………

ところで、少しのことばで大きな表現対象を表わそうとする場合には要約化と凝縮化とが同時に行なわれるのが普通である。したがって名詞比率の増大と文の長さの増大とはあいともなう傾向がみられる。……
文が脈文（場面、文脈）に依存して意味を通じることがあるが、その依存度が強い文章と弱い文章とがある。一般に凝縮的な文章は脈絡依存度が弱い。

脈絡依存度の強弱を測る一つのものさしはコソア系の指示詞（これ、この、あの、……などの語）の使用

率である。指示詞の使用率が大きい文章は脈絡依存度が大きいと考えてよい。……

字音語は日常のことばにもかなり定着しているが抽象的内容を表わす語には字音語が多い。……したがって文章の内容が抽象的なことをあつかうかどうかを測る一つのものさしとして字音語の使用率を用いることができる。……

字音語は談話語・広告に少なく、「週刊新潮」地の文、新聞記事、新聞見出しに多い。

凝縮的な文章、すなわち少しのことばで多くの内容を述べる文章には字音語の使用が多くなるように思われる。凝縮的な文章は文の構造が複雑であり、文の長さが長い。また凝縮的な文章は脈絡依存度が弱く指示詞の使用が少ない⁴⁾。

題名の調査結果⁵⁾と上記特性とを比較して見ると大体において適合するが、2・c) 文の構造が複雑になり文の長さが長くなる、という事項にはあてはまらない。これは新聞の記事の見出しにおいても同様であると思われる。これは表示性を高めるために省略化が行なわれているからであろう。例えば「～について」「～の研究」等々である。これは極度の要約化や凝縮化が行なわれた上に省略化が行なわれた結果であると解する。

C. 名詞の特性

本文を極度に抽象化した題名は名詞の比率が高いので、名詞の特性について考察する必要がある。名詞は文中にあって重要な構成要素であり、かつ自由にその役割を変えることができるものである。

名詞の特性について樺島忠夫は次のように述べている。

名詞は文の中で何が、いつ、何を、どこで、などを表わし、助詞をともなかってかなり自由に文の種々の成分となる。動詞、形容詞、副詞などは表現対象から抽象された「あり方」を表わす語であって、何についてのあり方であるかは、名詞がなければわからない。この「何」を名詞が表わすのである。また名詞は他の品詞より具体的なイメージや感情を喚起する力が比較的強い。俳句に名詞、特に季語が重要な働きをなすのもこのためである⁶⁾。

また名詞の特性について山崎良幸は次のように述べている。

名詞には、「物」「事」のように、極めて包括的な、い

題名とその用語の特性

わば抽象度の高いものもあるし、また「机」「椅子」「鉛筆」や、「運動」「思考」「悲哀」等のように、抽象度の比較的低い概念の表現もある。このように抽象化、概念化の程度や外延の違いによって、種々様々の名詞が存在するわけであるが、しかもそれは本来客体的なもの、また主体的なもの、一様に実体的な概念として把握されて表現されているのである。

名詞は本来それ自身として格をもっていない。それ故文の構成要素となる場合は、主語、述語、修飾語等、どのような格にも立つことができるわけである。

- (イ) 鳥が飛ぶ。
- (ロ) 流れが早い。
- (ハ) 学校だ。
- (ニ) 梅の花が咲く。

右の用例における、「鳥」「流れ」「学校」「梅」等はいずれも名詞であるが、(イ)(ロ)の「鳥」「流れ」は文の主語になっており、(ハ)の「学校」は述語になっている。また(ニ)の「梅」は、別の名詞「花」の修飾語になっている。(イ)(ロ)においては、「鳥」「流れ」は格助詞「が」の機能によって文の主語となっており、(ニ)における「梅」は格助詞「の」の機能によって修飾語になっていると見ることができる。また(ハ)においては「学校」は、陣述を表わす助動詞「だ」の表現の対象となることによって、文の述語となっていると見ることができるのである⁷⁾。

D. 題名群から収集した用語群の特性

特定分野の雑誌の記事題名群から用語群を集めこれらを集計し、使用頻度順(延べ使用頻度)に配列して見ると、上位のレベルからこの分野の主要語が見出され、かつこれらの主要語群の分布が密である。⁸⁾ これに対し抄録文⁹⁾から同様の方法でやってみると、かならずしも上位のレベルから主要語が見出せるとは限らないし、主要語の分布も比較的粗である。更に記事の文章¹⁰⁾から用語群を同様の方法でやってみれば、上記の関係はもっと明確になる。

このことから題名から用語群を収集することが有効であるということが実証されるのであるが、問題は収集する題名群の数に関係してくる。これについては筆者は一つの目安を前に発表した。

II. 合成語の分割単位について

題名分析法においては題名用語を処理し集計するの

に合成語を分割しなくてはならない。この場合、分割の原則を漢字2字とした。そしてこの単位を単位語と名づけた。勿論、漢字1字の語の場合はこれを単位語とした。漢語の場合は一般に2字が最も安定した語形であり、かつその種類も一番多いからである。

森岡健二は2字の漢語について次のように述べている。

……大部分の漢字形態素は他の漢字形態素と複合して、初めて語構成上の直接的単位となるという性格を帯びている。……漢字形態素の本質は、二字合して、和語形態素相当のものを形成するところにあると考えるべきである。¹¹⁾……

また斎賀秀夫は2字の漢語の使用について次のように述べている。

【二字の漢語の結合力】 調査対象を特に二字の漢語に限ったのは、主として調査対象をせばめるためだが、一方その選択にあたって次のような理由を考えたからだ。すなわち、現代日本語の中で二字の漢語は、延べ語数の点でも異なり語数の点でも、最も多く使われる種類であること、また、二字の漢語は結合の要素として最も多く用いられる種類であること等の理由による。

二字の漢語のほかに結合の部分としてよく用いられる種類には、一字の漢語があるが、その大半は二字の漢語とたがいに結合しあって用いられるので二字の漢語の結合状況を調べることによって、同時に一字の漢語の結合状況についても、ある程度の見通しが得られるものと思われる。¹²⁾

III. 合成語の結合タイプについて

題名分析語の特色であり、単位語の各種結合語を分析してカテゴリーを作るのである。単位語が結合するとこれらの間に特定の関係ができる。例えば類概念とその種差との関係、後部の語を修飾している関係、前部の語の部分を意味している関係等々が考えられる。これらの関係は観点によって異ってくる。

名詞の代表的構造について森岡健二は次のように述べている。

上位は漢語あるいは複合漢語、中位は語と語とでそれ以上細かく分割できない単純語、下位は語と語の組合せからなる複合語、最下位は単純語・複合語をともに含むが本来の意味を離れて他に転用された転用語である。各レベルの名が例外なく右の構造をもつとはいえないが、統計的事実として上のような傾向があるとい

えるであろう。……

……「実物を知らなくても名を聞けばわかる」ということは、名がしかるべきカテゴリーを表示する働きをしているからにはかならない。これを名の表示性と呼んでおく。

中位のレベルにある名は、理解のベースとなるカテゴリーを表示している。日本人は幼児から母語としてこれらの名を教えられ、日本語独特の理解体系、つまり類概念の枠組みを形成していく。「ベルシャ猫」「はだか麦」「ハーフカメラ」などいろいろの名を聞いて理解するということは、結局はこの基準名によってつくられた枠(カテゴリー)の中に、そのものをおとしていくということである。……

下位のレベルにある名は「種概念をあらわす語」+「類概念を表示する語」という構成をとり、表示性の最も明瞭な名である。上にあげた「ベルシャ猫」「はだか麦」「ハーフカメラ」を始めとして、石油ストーブ 色えんぴつ えのぐ皿 つりがね草 あげはちょう 日本人 など、所属すべきカテゴリーが名の一部に表示されている。名そのものの構造から中位の名の下位概念であり派生名であることが明らかであって、中位の名を知っている限り、この種を理解することは容易である¹³⁾。……

語学の分野では合成語における構成要素の結合関係の分類がいくつか考えられている。例えば斎賀秀夫¹⁴⁾は次のような項目を立てている。

(a) 並立関係(前部分と後部分とが対等の資格で並立する関係)

自由自在、新聞雑誌、政治経済、政府与党、直接間接

(b) 主述関係(前部分が後部分に対する主語になるような関係)

革命成功 対立激化 貿易不振 経済自立 技術向上 住宅不足 生産上昇

(c) 補足関係(前部分が後部分の客語になる関係)

原爆貯蔵 研究発表 経済援助 戦争放棄 経営参加 憲法違反 原子攻撃

(d) 修飾関係(前部分が後部分の意味を修飾する関係で、その修飾のしかたには様々な種類がある。)

国会議員 新聞記事 世界平和 国際会議 独占資本 反対運動 必要条件 最大目標 一般大衆

政府案 委員会 社会学 生産額 外国軍 映画祭 解決策

(e) 補助関係

戦争直後 教授一同 学生諸君 生産本位 議員自身 憲法以前

合理化 戦争後 在学中 事実上 可能性 経済的 国際式

上記の分類はあまりにも簡単であり、目的が全然異っているので検索語の作成には適用できない。もっと異った観点で分類されねばならぬ。

また林四郎は体言¹⁵⁾の表わす意味の分類を試みている。「水」を例にして示すことにする。

A 本質層

水は液体である

B 属性層

(1) 水が流れる

(2) 水より冷たい

(3) 水の力 → 水力

C 交渉層

(1) 水を配る → 配水

(2) 水にもぐる → 潜水

(3) 水で洗う → 水洗い

(4) 水から上がる

D 比喩層

(1) 水のような酒

(2) 水のように冷たい

E 応用層

[天然の空間的状态]

川の水

[天然の時間的状态]

春の水

[容器中の状态]

瓶の水

[特定用途下の状态]

酔いざめの水

F 対比層

水と油

G 価値層

(1) プラス価値

[生命をささえるもの]

うるおい しめり

[汚れを洗い落とすもの]

すすぐ

題名とその用語の特性

〔美しいもの〕

玉水

〔神聖・厳肅なもの〕

若水

(2) マイナス価値

〔濡れさす〕

入水

〔ぐじゃぐじゃにする〕

水びたし

〔冷えさせる〕

水をさす

〔味をなくす〕

水を割る

H 結合層

(1) 和語との結合

〔水+名詞〕 水音

〔水+動詞〕 水割り

〔名詞+水〕 雨水

〔動詞+水〕 湧き水

〔形容詞+水〕 大水

〔疊語〕 みずみずしい

〔水+接尾語〕 水っぽい

(2) 漢語との関係

〔水+名詞〕 水資源

I 関連層

1. 集合状態

<静的> 池

<動的> 川

2. 微小状態 霧

3. 落下状態 雨

4. 自然環境状態 浜

5. 建造環境状態 港

6. 生体発生状態 涙

7. 人造物状態 ジュース

J 潜在層

1. <静> 淀む

2. <動> 流れる

3. <音> せせらぎ

4. <水気のある状態> うるおう

5. <水に関する行為> 飲む

6. <水に対する行為> 身投げ

K 変異層

「み」に関する情報 みなもと

上記の例は助詞等を介して結合する場合の例が含まれており、詳細なものである。特に題名分析語において重要な所は、B(属性層)、C(交渉層)、E(応用層)であり、I(関連層)は類似語、同義語として処理できるし、H(結合層)は前部結合、後部結合の分析で処理することができる。A(本質層)はB、C、E等を分析し整理すれば自然と出来るものである。

しかしカテゴリーとして上記のようなものが役立つものでなく、前述したような検索語を作成する目的であれば当然カテゴリーも変って来る。ここで重要なことはカテゴリーを作成するには各種の結合形態を調べ、分析しなくてはならないことが判明した。

カテゴリーの項目は絶対的なものではなく、各分野において、各使用目的によって作成しなくてはならない。しかし、もう少し、研究すれば共通的な要素を発見することができるであろう。

IV. 結

題名分析法について各種の文献をもとにして考察したのであるが、まだ不十分な点が多々あるように思われる。しかし、重要なポイントについては一応解決したつもりである。

今回の調査では未知の分野である国語学、表現論、文体論、日本文法論、語構成論等に首をつつこんだので、時間をかけたわりに能率があがらなかった。

これはあくまでも素人の感想であるが、国語学関係の文献を探して感じたことは、古文、古語を対象にした研究が多いこと、ミクロ的に国語をとらえている研究が多いこと、必然的に国語を動的でなく、静的にとらえていること等を感じた次第である。また一方では国語学者の研究を期待し、われわれの分野の者との協力を期待するものである。

(図書館・情報学科)

1) 浜田敏郎. "題名分析法による検索語基礎設計の応用性について," *Library and information science*, no. 6, 1968, p. 123-54.

2) 樺島忠夫. "ジャンルの文体特性" <森岡健二, 等編. 作文講座 4. 文章の理論. 明治書院, 1968> p. 156-7.

3) 市川 孝. "文と文章論" <国立国語研究所. ことばの研究. 同研究所, 1959> p. 37-8.

4) 樺島忠夫, *op. cit.*, p. 160-8.

5) 浜田敏郎. *op. cit.*, p. 123-54.

- 6) 樺島忠夫. 表現論 ことばと言語行動. 綜芸会, 1963, p. 109-10.
- 7) 山崎良幸. 日本語の文法機能に関する体系的研究. 風間書房, 1965, p. 137-8.
- 8) 浜田敏郎, *op. cit.*, p. 138-9.
- 9) 日本科学技術情報センター. 日本語による標題索引技術委員会. マイクロソールラス作成用語彙表. 1967, p. 119.
- 10) 国立国語研究所. 現代雑誌九十種の用語用字, 第3分冊. 分析. 秀英出版, 1964. <国立国語研究所報告 25> p. 262-93.
- 11) 森岡健二. "文字形態素論", **国語と国文学**, vol. 45, no. 2, 1959, p. 22.
- 12) 斎賀秀夫. "語の結合の長さ" <国立国語研究所. ことばの研究. 同研究所. 1959> p. 236.
- 13) 森岡健二. "名の表現性と表示性", **言語生活**, no. 138, 1963, p. 16-21.
- 14) 斎賀秀夫, *op. cit.*, p. 242-3.
- 15) 林 四郎. "名詞の意味の記述法について", **国語学**, 72集, 1968, p. 68-72.